

風姿花伝第三、問答条々

九

能に花を知る事

問。能に花を知る事、この
条々を見るに、無上第一な
り。肝要也。又々不審なり。
是何として得心べきや。

これなに
こゝろう

〔口訳〕問。今までの条々に説かれた所を見
ますと、能芸の道に於ては、花といふ
ものを知る事が、無上第一の要件であ
り、最も肝要なことであつて、しかも
十分に会得出来ないむづかしいもので
あると思ひますが、この花を如何にし
て心得たならば良いでありますか。

答。此道の奥儀を究むる所
なるべし。一大事とも、
秘

答。その点こそ、この道の奥儀を究
める所といふべきであらう。一大事と
いふも秘事といふも、ただこの花を究

事とも、たゞ此一道なり。

先まづ、大方けい、稽古こ、物真似まね

の条々に詳くわしく見えたり。

時分の花、声の花、幽玄ゆふげんの

花、かやうの条々は、人の
目にも見えたれども、その

態わざより出いで来る花なれば、

咲さく花はなの如ごとくなれば、又や
がて散ちる時分あり。されば、
久ひさしからねば、天下まことに名望めいぼう少すく
なし。たゞ、眞まことの花は、咲さ

久しく花を保つことが出来るわけであ
る。この究極の道理を知るには如何し
たら良いか。或は別紙の口伝の中にそ
れが説かれて居るかとも思ふが、ただ、
わづらはしいむづかしいものだと考へて
はならない。即ち正道を踏んで怠らな
ければ、これは得られるものだ。

く道理も、散る道理も、人
のまゝなるべし。さては久ひさし
かるべし。この理ことを知しらん

めるといふ一道に存する。まづ大体の
事は、年来稽古条々や物学条々の中
に詳しく示されて居る。即ち時分の
花、声の花、幽玄の花などに關するこ
とは、人の目にもよく見える花である
が、これはそのわざ、から生ずる花であ
るから、従つて又咲く花の如きもので
ある故、やがて散つてなくなる時期が
来る。即ち久しくつづく花でないから、
天下に名望を得るなどといふ事は先づ
望めないものである。ただ、眞の花は、
咲く因由も散る因由も、其の人の心が
け次第できまるものである。それで、

3

事、如何すべき。若別紙の
口伝にあるべきか。たゞ煩
はしくは心得まじき也。

先、七歳よりこのかた、年
来稽古の条々、物真似の
品々を、能々心中に当てゝ分
かち覚へて、能を尽くし、
工夫を極めて後、此花の失
せぬ所をば知るべし。此物
数を極むる心、則、花の種
なるべし。されば、花を知
らんと思はゞ、先種を知る
べし。花は心、種は態なる
べし。

先づ七歳以後、年来稽古の条々や物
学のしなじなを、十分に心中に分別し
覚え込み、芸能の稽古を尽くし、工夫
公案を究めて後に、この「花の失せぬ
所」を証得するやうにせよ。この、能
に於て各様の物真似を学び、稽古を尽
す心が、花の種であると思ふ。それで
花を証知しようと思ふならば、先づ花
をさかすべき種が何であるかをさとる
必要がある。「花は心・種はわざ」と
いふべきである。

古人云、

古人の言に、

普き雨に悉

心地含ム諸ノ種ヲ、 普雨悉ク

頗に花の情を悟り已れば

菩提の果

皆萌ス、 頤悟リ花ノ情ヲ已レバ、

自づから成ず

といふ語がある。

菩提ノ果自ラ成ズ。

凡そ、 家を守り、 芸を重

んずるに依つて、 亡父の申置きし事どもを、 心底に留

めて、 大概を録す。 所詮、
他人の才覚に及ぼさんとに
はあらず、 たゞ、 子孫の遅
疑を残すのみなり。

風姿花伝条々 以上

于時、 応永七年庚辰卯月十三日

左衛門大夫

秦 元清書

自分は、 家を守り芸を重んずるにつて、 亡父の遺訓を心底にとどめて、 その大要を此処に記し置くものである。 結局これは、 他人の目にかけ他人の才覚にまで及ぼさうといふつもりのものではない。 ただ子孫の庭訓となるべきものを後世に遺さんがために記したものである。

この段は問答条々の終結であり、又同時に、年来稽古条々・物学条々・問答条々の三つを含めての結尾の段である。そこで言はんと欲する所は「花の重大性」である。「能に花を知る事、この条々を見るに無上第一なり、肝要なり」といふ問者の言、「此道の奥儀をきわむる所なるべし、一大事とも秘事とも、ただこの一道なり」といふ答者の肯定、何れも如何に「花」が重大であり肝要であり無上第一であるかを力強く示して居る。花伝書一篇は、この花を伝へんが為に記されたものである。花

を得るか得ないかは、一座の興廃は勿論、能楽全体の死活盛衰を決定するところのものである。一大事視せざるを得ない事情はここにある。「一大事」の語は禅よりの語である。「死ぬか生きるか」の場合に用ひられる語である。我々は軽々にこれを看過してはならない。生死の巖頭に立つた際の厳肅さを以て味ははねばならぬ。

かく重大な花といふものに對して、如何なるものが花であるか、その本質はどこにあるかとは、何人といへども知り究め度くなるのが人情である。「又々不審なり、是何として心得べきや」といふ質問が出るの

が当然である。これに対して世阿弥は、「先づ大方、稽古物まねの条々に精しく見えたり」といふ。それは今まで説いた所にくはしく説明してあると一喝を下した。そしてわざ、より出で来る花は必ず散り失せる、眞の花は生涯散り失せないといふ事をくり返し述べ、眞の花については、別紙口伝にあるかも知れないと幽かに匂はせた言ひぶりをしてゐる。かやうに鰻の香を嗅がされては、何人も別紙口伝一見の希望を起すに相違ない。しかし、世阿弥は決して直ちに秘事を明かさうとはしない。時期の到るを待つて居る。時期到れば、自悟自証出来るものであり、時期到らざれば、伝へても無益であるからである。彼は「先づ七歳ものなのである。

「この物数を究むる心、則ち花の種なるべし」。世阿弥は先づ花の種、が如何なるものであるかをのべる。「花を知らんと思はば、先づ種を知るべし」といふ。そして、最後に、最も含蓄ある暗示として、「花は心、種は態なるべし」といふ一語を下した。大がいこれで悟れといふ氣合で

ある。

最後の慧能大師の偈文の引用は、世阿弥の考察のしかたや、修行法に、
禪の影響の多い事を物語る資料である。この方面については、「無所住
と一行三昧」といふ小稿（国語教室、昭和十年五月号）で少しばかり
論じておいた。

*心地含諸種——これは六祖壇經の中に説かれてゐる禪宗六祖慧能大師の偈である。その文を
引用してみると、「若人具_二三昧」（二三昧_二一相三昧と一行三昧）、如_下地有_二種含藏_一、長養

成熟其_上實。一相一行亦如_レ此。我今説_レ法、猶如_三慈雨普潤_二大地、汝_レ仏等性、譬_二諸種子_一、
遇_二茲霑_一悉得_二發生_一。承_二我旨_一者決護_二菩提_一、依_二吾行_一者定証_二妙果_一。聽_二吾偈_一、曰。心、
地、含_二諸種_一、普_レ雨悉皆萌、頓悟_二華情_一已、菩提果自成。」とある。